

平成 26 年度 学位記授与式 学長告辞

本日ここに、卒業式を迎えられた皆さん方に対し、大学を代表して祝意を表するとともに、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申しあげたいと思います。そして、君たちが明日からの新たな一步を歩み始めるにあたり、「松ヶ崎から世界に飛翔せよ」これを卒業生の皆さんへのはなむけの言葉としたいと考えます。同じく京都工芸繊維大学もまた君たち卒業生とともに、世界に羽ばたき、飛翔しようとしています。

京都工芸繊維大学は、昨年秋には、スーパーグローバル大学に選ばれました。また一昨年には、文部科学省から機能強化事業を推進する大学に抜擢されています。まさしく本学の名誉であり、君たちと喜びを分かち合いたい。こうした絶好の機会が得られたのも、学生諸君の努力と実績、日々の研鑽があったからであり、君たちの明日からの活躍についても大いに期待しているところです。しかしこれはまだ、オリンピックの代表選手に選抜されたようなものであり、メダルを取って世界に冠たる大学にならねばなりません。世界的な競争力をつけ、世界で戦える大学になるために、今後 10 年間をかけて本学全体の国際化をはかる計画を実施します。学生諸君も留学や海外インターンシップに参加して頂き、すべての学生が海外体験を経験してから社会に出ていくことが大切です。海外での体験学習を経て、海外で活躍できる人材、現場でリーダーシップを発揮できる人材、我々がテックリーダーと呼ぶ人材を輩出していきたいと考えます。

本学の卒業生は、これまでも、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者としてのキャリアを積み上げてきました。これは企業や社会から定評を得ている事実であり、私たちは、皆さんの能力や知識について、自信と確信をもっております。

しかし今日の日本社会では、18 歳人口が減少し、財政的赤字も 1000 兆円に達しようとしています。こうした社会情勢・経済情勢によって、日本社会はその価値観を大きく変えていくことが予想されます。近い将来、現在ある職業のうち、3 分の 2 が消滅するといわれており、労働時間も現在の半分以下、週に 20 時間を切る時代が来ると予想されています。こうした大きな社会変革の時期を生き延びるためには、変化に柔軟に対応できる自己研鑽能力、自己教育能力が重要です。発展途上にある君たちが、人生の中で持続的な進化を遂げること、

これが日本社会をよくする唯一の道だと考えます。卒業していく君たちに本学の将来計画や教育方法を伝達することの意味もそこにあります。

京都工芸繊維大学は、いま 3 つの拠点形成事業に取り組んでいます。第一に、地方創成の拠点となって、地域活性化に寄与すること。第二に、イノベーションの拠点となって産業界に貢献すること。第三には、国際交流の拠点となって、国際貢献活動に寄与すること。より具体的に言えば、ユニット招致と呼ばれる方法でハーバードやスタンフォード、あるいは ETH や RCA といった海外の有力大学から複数の講座やグループを招聘し、共同研究や共同教育を行います。逆に、タイのバンコクやフランスのパリにオフィスを開設し、海外インターンシップや交換留学の拠点として活用します。平成 28 年度にはタイのチェンマイ大学とジョイント・ディグリー制度によって新しい大学院専攻を開設し、外国人学生を本学の大学院生として受け入れ、共同教育を実施します。今年中にはバンコクに建設中のキングモンクート大学産学連携センターの中に共同研究の拠点を開設する計画です。日本国内においても、京丹後市サテライトキャンパスや綾部市地域連携室が活発に活動していますが、今年から東京青山に東京オフィスを開設しました。

京都や在阪の有力企業と共同研究を実施すると同時に、多くの自治体からの要請に応えて製品や商品の開発も行っています。こうした具体的な大学の動きを皆さんに知っていただき、卒業後も情報を共有していくべきであると考えています。なぜなら卒業生の活躍についてもいまだに共有できていない情報がたくさんあるからです。トヨタ、日産、ホンダ、マツダのデザイン部長がすべて本学の 1982 年卒の同級生であることや、クラレ、ワコール、島津製作所などの企業や建設会社において、多くの本学出身が役職者となっていること、現役学生の活躍においても、2012 年度全日本学生フォーミュラ大会において、本学が総合優勝の栄誉に輝いたのに続いて、2013 年度においても、2014 年度においても総合 5 位の成績を収め、技術力の高さが示されています。またハーバードで開催される遺伝子組み換えコンテストにおいて優秀な成績を収めました。さらに本学の教育方法は、日本機械学会教育賞を連続受賞、日本建築学会教育賞を受賞したことなどにみられるように、実践的な教育方法が学会や社会でも高く評価されています。

こうした実績を踏まえて京都工芸繊維大学は、その特色を飛躍的に伸張させ、全世界に飛び立とうとしています。今年 1 月に 1 年生全員に TOEIC テストとスピーキングテストを実施しました。スーパーグローバル事業によって、今年 4

月から若手教員 10 名が毎年海外に派遣されることになります。1 月には、事務職員の方全員が TOEIC を受験し、英語力の向上に努めるだけでなく、スーパーグローバル大学に選ばれたスタッフとしての意識を高め、キャンパスの国際化に貢献しています。研究室に関しても国際化モデル研究室を選定し、国際セミナーや国際学会での発表を奨励しています。このように教員、職員、学生、本学の構成員全員がスーパーグローバル大学の一員としての自覚をもって行動し、キャンパス全体が国際化の雰囲気を満たされています。

さて、ここで、こうした素晴らしい実績や活動に匹敵する、一人の大学院生が示してくれた勇気ある行動を報告したいと思います。

実は、本学の教授が長年にわたって金属水銀を無届けで保有し、廃棄していたことが判明しました。研究者として教育者としてあるまじき行為であり、当該教授に対して懲戒処分を行いました。調査の結果、学生への健康被害はないこと、水銀が学外に流出していないこと、が確認されています。それにしても、なぜ長年にわたりこのことが見過ごされてきたのか。それは、気づいた人がいたとしても、声を上げにくい、閉鎖的で抑圧的な雰囲気や体質が研究室とその周辺に充満していたからだと考えられます。

ではなぜ、この件が発覚したのか？ それは、ことの重大さに気付いた一人の大学院生が我々に知らせてくれたからです。これまで、多くの人が知っていながら知らないふりをし、見て見ぬふりをしてきた、研究室のタブーに対して、異を唱えることは大変勇気がいる行為です。教授の研究姿勢に対して、これはどう考えてもおかしいと、否を唱えることは、大変な心理的重圧がかかります。歪んだ環境の中にあって、健康な常識を保つことの難しさ进行を考えると、研究室を正常化しようとする一人の学生の努力には、心から敬意を表したいと思います。この事案は、はからずも、本学の学生の素晴らしさ、本学は学生の力を必要としていること、学生は立派な大学の構成員であること周知させる出来事となりました。

「教育とは、世界を変えるために用いることができる、もっとも強力な武器である。」とネルソン・マンデラ氏が言っています。私たちも、君たちも、教育の力、そして京都工芸繊維大学の力を信じ、お互いに成長し続けていきたいと思っています。

平成 27 年 3 月 25 日
京都工芸繊維大学長
古山正雄